

[成果情報名] 酒造好適米「山田錦」の安定生産のための生育指標

[要約] 「山田錦」の目標収量である 45kg/a を得るための m^2 籾数は 185 百粒で、穎花原基分化始期（出穂 24 日前頃）の生育指標値（草丈 (cm) × m^2 茎数 (本) × SPAD 値 / 10,000) が 115 の場合、出穂 18 日前と 10 日前に窒素成分で各 0.2kg/a を施用することで得られる。

[キーワード] 山田錦、収量、生育指標

[担当] 三重県農業研究所 伊賀農業研究室

[分類] 研究

[背景・ねらい] 近年、高級酒嗜好から酒造好適米品種「山田錦」の増産が望まれている。一方、「山田錦」は伊賀地域で契約栽培されているが、生産者間で収量や品質に違いがみられ、倒伏の発生により収穫作業の問題となる場合がある。そこで、「山田錦」の生育指標を作成し、安定生産のための参考とする。

[成果の内容・特徴]

1. 目標収量である 45kg/a を得るための m^2 籾数は 185 百粒で（図 1）、その他の収量構成要素は表 1 のとおりである。
2. 穎花原基分化始期（出穂 24 日前頃）の生育指標値（草丈 (cm) × m^2 茎数 (本) × SPAD 値 / 10,000) が 115 の場合、穂肥を出穂 18 日前と 10 日前に窒素成分で各 0.2kg/a 施用することで 185 百粒の m^2 籾数が得られる（図 2）。具体的な穎花原基分化始期の生育の目安は草丈 80~85cm、 m^2 茎数 480~520 本、SPAD 値 28 である。なお、玄米タンパク質含有率を目標である 6.4%(水分 15%換算値)以下とするため穂肥窒素量は各 0.2kg/a を上限とする。
3. 移植後 30 日の生育指標値が 90 の場合、穎花原基分化始期の生育指標値は 115 と推定される（図 3）。具体的な移植後 30 日の生育の目安は草丈 36~45cm、 m^2 茎数 500~600 本、SPAD 値 40 である。

[成果の活用面・留意点]

1. 伊賀地域において 5 月下旬に稚苗を 18.2 株/ m^2 の栽植密度で移植する条件に適用する。
2. 収量等は 2.0mm 篩上の玄米についての調査結果である。
3. m^2 籾数が 210 百粒以内、収量が 48kg/a 以内であれば倒伏は 2 ランク以下（0 無~5 甚の評価）の発生で問題とならない。また、穎花原基分化始期の生育指標値が 130 以内であれば出穂 18 日前と 10 日前に窒素成分で各 0.2kg/a の穂肥施用が可能である。
4. 移植後 30 日の生育指標値が 100 を超える場合は倒伏防止のため中干し程度を慣行よりやや強める。

[具体的データ]

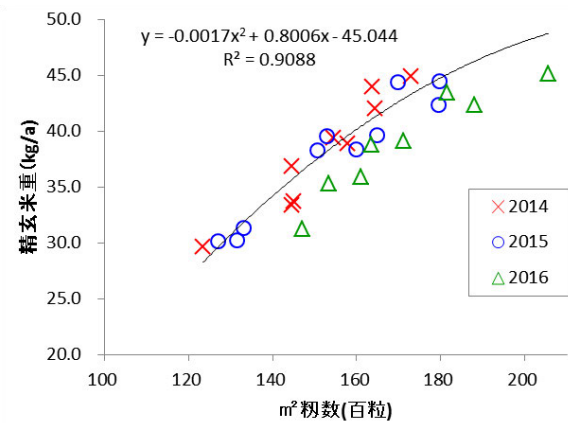


図1 m² 粒数と精玄米重の関係

表 1 目標収量(45kg/a)を得るための収量構成要素

m²粒数	m²穂数	一穂粒数	登熟歩合	千粒重
185百粒	350~400本	46~53粒	85%以上	28.5g以上

注)穂数および一穂粒数は栽植密度が18.2株/m²の場合

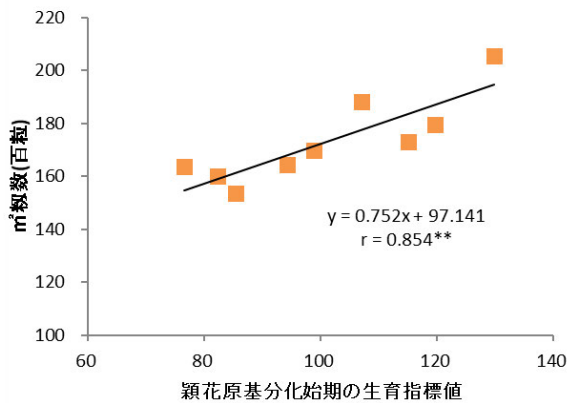


図2 穎花原基分化始期(出穂24日前頃)の生育指標値とm²粒数の関係

注)生育指標値は草丈(cm)×m²茎数(本)×SPAD値/10,000
注)穂肥は出穂18日前と10日前に窒素成分で各0.2kg/a施用

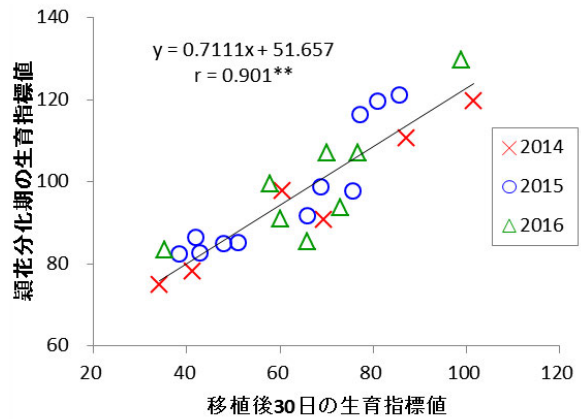


図3 移植後30日と穎花原基分化始期(出穂24日前頃)の生育指標値の関係

注)生育指標値は草丈(cm)×m²茎数(本)×SPAD値/10000

(執筆者氏名) 中山幸則

[その他]

研究課題名：原種および奨励品種決定調査試験

予算区分：県単

研究期間：2014～2016年度

研究担当者：中山幸則、太田雄也、瀬田聡美

発表論文等：なし